



**Data**

監督：パク・ジョンウォン  
 原作：イ・インファ  
 出演：アン・ソング/チョ・ジェヒ  
 ヨン/キム・ヘス/キム・ミ  
 ヨンゴン/チェ・ジョンウォ  
 ン/キム・ヒラ/イ・スンチ  
 ヨル/キム・イル/イム・イ  
 ルチャン/キム・ジェロク/  
 シン・チョルジン

👁️👁️ みどころ

阪神・淡路大震災と同じ年の1995年に大鐘賞8部門を受賞した名作を、今やっと鑑賞。ユウラク座の「韓国映画セレクション」の企画に感謝だが、客席がガラガラなのが残念。時代は1800年の李朝時代。第22代国王正祖は「南人派」を登用して差別撤廃を含む大胆な改革を進めたが、これに「老論派」が大抵抗！政治抗争と権力闘争は、先代が書いたという『金蔭の書』をめぐる殺人事件に発展！来るべき衆議院議員総選挙では、小泉改革の真っ只中の2005年9・11総選挙で得た自公3分の2の議席はいかに？予想される政権交代に、本作にみる権力闘争の姿は1つの参考になるのでは？

\* \* \* \* \*

せっかくの立派な企画だが・・・

大阪の天六にあるユウラク座は、2009年5月23日から7月3日まで「韓国映画セレクション」と題して、韓国映画12本を2本立てで7日間ずつ連日オールナイトで上映している。そのタイトルと作品名は、第1週は「李朝時代の愛と官能」と題して『スキャンダル』(03年)と『恋の罟』(06年)、第2週は「李朝の権力と野望」と題して『王の男』(05年)と『永遠なる帝国』(95年)、第3週は「朝鮮戦争の悲喜劇」と題して『トンマッコルへようこそ』(05年)と『約束』(06年)、第4週は「究極の愛の姿」と題して『シークレット・サンシャイン』(07年)と『ユア・マイ・サンシャイン』(05年)、第5週は「光州事件とその後」と題して『光州5・18』(07年)と『なつかしの庭』(06年)、第6週は「庶民の暮らしの変化」と題して『家族の誕生』(06年)と『僕が9歳だったころ』(04年)。

このうち私が観ていないのは、『永遠なる帝国』『なつかしの庭』『家族の誕生』『僕が9歳だったころ』の4本。したがって、これは絶対観るつもりだが、それ以外の既に観た8本も名作ばかり。こんな立派な企画だが、ユウラク座は場末の映画館というイメージが強すぎるためか土曜日の夕方6時から入った館内はガラガラ。そのため私は『王の男』をもう1度味わうことに。難解な『永遠なる帝国』も良かったが、中国の陳凱歌（チェン・カイコー）監督の名作『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）の韓国版ともいうべき（？）『王の男』のすばらしさを再度堪能した。

北朝鮮が2度目の地下核実験をやり、短距離ミサイルを飛ばしたことによって朝鮮半島の緊張感が高まっている今、第3週の「朝鮮戦争の悲喜劇」をはじめとする何ともタイムリーなユウラク座のこの企画の成功を祈りたいが・・・。

## あの大震災の時代の名作を今！

今回の「韓国映画セレクション」全12作品は『永遠なる帝国』以外はすべて2003年以降の新しいもの。『永遠なる帝国』は1995年の作品で、日本公開は1997年らしい。

1995年といえば、今は記憶が薄れているかもしれないが、1月17日に阪神・淡路大震災が発生した年。1995年の夏以降、私は芦屋中央地区の震災復興土地区画整理事業のため、まちづくり協議会の顧問弁護士として忙しい毎日が始まった。したがって、その頃の私は映画を観る時間がほとんどなかったから、本作が韓国で大ヒットし第33回（1995年）大鐘賞で最優秀作品賞・監督賞など8部門を受賞したことなど知る由もなかった。そんな阪神・淡路大震災の年の名作を今鑑賞することができたのだから、ユウラク座の企画に感謝！

## 李王朝時代に少しは理解を！

第1週は「李朝時代の愛と官能」と題して『スキャンダル』と『恋の罠』、第2週は「李朝の権力と野望」と題して『王の男』と『永遠なる帝国』との時代モノが続く。確かに『スキャンダル』『恋の罠』『王の男』は李朝時代の面白い映画だった（『シネマルーム4』192頁、『シネマルーム19』93頁、『シネマルーム12』312頁参照）が、私を含む多くの日本人は徳川時代300年のイメージはあっても、1392年から1910年までの李朝時代500年のイメージはないはず。したがって本作で私が1人だけ知っている韓国の名優アン・ソンギ演ずる『永遠なる帝国』の主人公正祖が、18世紀李朝の第22代国王であることやその功績についての知識はゼロ。

もっとも、『王の男』の王燕山君（チョン・ジニョン）を観ていると、殺された（？）母親への思慕の念が彼のエキセントリックな性格形成の要因だったことがよくわかる（『シネマルーム12』312頁参照）。それと同じように、「南人派」として小泉純一郎元首相以

上の改革を推し進めている『永遠なる帝国』の正祖も、「老論派」であった第21代国王英祖に殺された自分の父親であるサド王子への思慕の念が政治改革の大きな原動力になっていることが少しずつわかってくる。ちなみに第22代国王正祖の時代は1776年～1800年。そんな李朝時代における、「身分差別を撤廃したい」などという正祖の思想は革命的ともいえるもの。子供たちが読む「論語」の中にみる君子の役割など、政治のあり方、君子のあり方等について本作から私たちが考えるべき政治改革のテーマは多いうえ、今日的共通点も多い。したがって、本作や『王の男』の舞台となった李朝時代に少しは理解を！

## スタートはチャン検書官の死亡から

映画が始まるとすぐに流れてくるハングル語の字幕は、ネット情報によれば当時の時代背景の説明らしいが、日本語訳がついていないから私にはチンプンカンプン。しかし、映画冒頭に展開されるのは、宮廷の書庫で発見されたチャン検書官の死亡をめぐる緊迫感いっぱいのストーリー。

その報告を受けた正祖は事件の真相解明を、なぜか対立している老論派のボスである宰相のシム・ファンジ（チェ・ジョンウォン）に命じた。もっとも、同時に正祖の側近である南人派のイ・インモン（チョ・ジェヒョン）に対して、正祖が亡きチャンに預けていたというある大切な本を探すことを命じたからコトはややこしい。インモンが頼りにするのはチョン・ヤギョン刑曹（キム・ミョンゴン）さて、2人の調査はいかなる展開を？

## チャン検書官の死因は？第2、第3の事件は？

チャン検書官死亡についてのシム・ファンジ宰相の正祖への報告は、「持病にもとづく窒息死」だったが、イ・インモンとチョン・ヤギョンの調査によれば、チャン検書官の死亡は硫黄系の毒ガスによるものだったから大変。

なぜか日本には輸入されなかったが、中国にも韓国にもあったのが宦官制度。徳川時代は「大奥」が大きな存在感を示したが、李朝時代は南人派VS老論派の対立とは別に、宦官人事の中に独自の役割が？そんな風景がチラホラ描かれるのが、チャン検書官の死亡に続いて起きるイ宦官の死亡。

さらに本作の紅一点として、出番は少ないが大きな存在感を示すのがイ・インモンの離婚した妻コン・サンア（キム・ヘス）。ここで興味深いのは、2人の離婚原因はコン・サンアが禁断のキリシタンであることがバレたためだということ。今でこそ韓国はキリスト教徒が圧倒的に多いが、李朝時代は徳川家光時代と同じようにキリシタンは弾圧されていたわけだ。そして、キリシタンとして投獄されていた学者もイ宦官に続いて死亡。

こんな風に1日のうちに、チャン検書官の死亡に続いて第2、第3の死亡事件が発生していくのだが、それは一体なぜ？『王の男』では、王宮に迎え入れられた旅芸人のチャンセン（カム・ウソン）とコンギル（イ・ジュンギ）らが風刺の効いた芝居をやるたびに国

王が誰かを殺す事件が発生したが、『永遠なる帝国』でも第2、第3の死亡事件が発生。さて、そんなミステリーのその後の展開は？

## この権力闘争から何を学ぶ？

この映画にみる、正祖による政治改革とそれに抵抗するシム宰相をトップとする老論派との権力闘争はすさまじい。本作の見どころの第1はそれだ。

2001年4月から2006年9月まで続いた小泉改革は圧倒的な国民の支持を受けたが、今やその「揺り戻し」はすさまじく、郵政民営化の後退と財政健全化路線の後退が顕著。2005年の9月11日に行われた第44回総選挙で衆議院の2/3を獲得した自公政権は、来る2009年9月までに実施される衆議院議員総選挙を前に風前のともしび？9・11総選挙で当選した83名の小泉チルドレンも、それぞれ生き残りの模索を余儀なくされている。しかし、それはあくまで21世紀の平和な民主主義国家内での政治闘争・権力闘争のお話。

それに対して、18世紀の李朝時代における南人派VS老論派の政治闘争は血で血を洗う生きるか死ぬかの権力闘争だから、目の玉をしっかりと開いて直視することが大切だ。

## 『金藤の書』とは？『詩経詩録』、『詩経詩録考』とは？

ここでキーワードとなるのが、先代の第21第国王英祖が書いたという(?)『金藤の書』そしてまた、『詩経詩録』と『詩経詩録考』。これらの本は一体ナニ？それが本作全編を通じたミステリーの源泉だ。『詩経詩録考』は『詩経詩録』の解説本らしいが、本当に『詩経詩録』は存在するの？ひょっとして誰かが『詩経詩録考』を偽造することによって『詩経詩録』が存在すると錯覚させているのでは？

本作は124分と長い。緊迫感にあふれているから観ていても全然飽きない。この『金藤の書』と『詩経詩録』、『詩経詩録考』をめぐるミステリーは、トム・ハンクス主演の『天使と悪魔』(09年)の前作だった『ダ・ヴィンチ・コード』(06年)と同様、なかなか難しい。映画のラスト近くになって、やっと『金藤の書』をめぐるミステリーは、イ・インモンが離婚した妻ユン・サンアと密会し、ある書物を受け取るシーンによって明らかにされるから、それまでじっとがまんすることが大切だ。

さて、これらの書物には一体ナニが書かれていたの？また正祖は最初に死亡したチャン検書官に何の本を預けていたの？すると、チャン検書官の死亡は自然死？それとも毒殺？そんな事件解明の結果は？そして多少尻切れトンボ気味ながら、あっと驚く正祖改革の行方と本作の結末は？それは、近く明らかになろう小泉改革の終焉の姿とともに、あなた自身の目でしっかりと。

2009(平成21)年6月1日記